優秀賞

一般 文章（手紙・作文）部門

捨てられないレシート

北海道爾志郡
阿部 絵里

私は買い物をした後レシートをとっておくタイプではない。家に帰るとすぐにぽいっと捨ててしまう。コンビニなんかではレジのレシート入れに入れて帰ってくるほどだ。

私は五年前に結婚し、その年に息子が生まれた。初めての育児と家事で毎日があっと言う間に過ぎていった。夜中の授乳で寝不足にも関わらず、ぐずって昼寝をしてくれない息子。そんな日々にイライラが募っていった。旦那も協力してくれて、日中の力仕事で疲れているはずなのに、夜中一回は必ず起きて息子にミルクを飲ませ、私の睡眠時間を確保してくれていた。ありがたいと思いつつもいらだちが消えることはなかった。

生まれて半年ほど経った息子は夜中の授乳も減り、夜に寝てから朝方まで寝てくれるようになった。息子が泣いたら起きるのは私だったり、旦那だったり、気がついた方が起きていた。（時々私は狸寝入りをし、睡眠時間を確保していたのだが）そんなある日、旦那が仕事に出かけた後の静かなリビングとキッチン。そろそろお腹をすかせて息子が起きるだろうと、私も起きてミルクを作るためキッチンへ。するとそこにはミルクと白い紙が。

「ミルク　熱いから温度確かめてね！

１２０　ＡＭ６：５０」

余裕もなく育児に追われていた私達。息子中心で自分たちのことは二の次だった半年。おもちゃや洗濯物が散乱したリビング。コロコロでごまかした手抜き掃除。何だか申し訳ない気持ちと「ありがとう」が私の心いっぱいに広がった。久しぶりに旦那からラブレターをもらったような気持ちになった。

ちょうど起きた息子を抱いてふとその白い紙を裏返してみると、どこかで買い物したのであろうレシートだった。そして私はそれをそっと財布にしまった。

今年五歳になった息子は、顔も性格も旦那にそっくりだ。